

二〇二五年度 一般入試A日程

国語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は27ページ、解答用紙はマークシート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、解答用紙（マークシート）に記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、解答用紙（マークシート）の所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、解答用紙（マークシート）の左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分

100点)

(解答番号

1

、

34

)

第一問 次の文章は、砥上裕將の『一線の湖』の一節である。主人公の「僕」(青山)は、日本を代表する水墨画家の篠田湖山に

師事する大学三年生である。「僕」は、観客に向けた水墨の実演会で大きな失敗をしてしまい、このまま水墨の世界で生きていくのかという、大きな壁にぶつかっていた。そのような中、「僕」は、同じく湖山門下の西濱さんが体調不良になってしまったことで、彼が教えている図工教室を代わりに手伝うことになった。本文は、「僕」が外部講師として、小学一年生の子どもたちへ、「指でシイタケの水墨を描く」をお題に、二回目の授業を行っている場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

僕はそれぞれの机を回って、助言をしようと思っていたけれど、どうやらその必要はなさそうだった。その代わり、一人ひとりにシイタケを一個ずつ配った。こちらに気づく子もいれば、気づかない子もいた。

僕はただ素直にすごい、と思った。一人の絵師としてウラヤましいとさえ思った。

僕ならシイタケを描けと言われても、こんなに本気になれないし、ましてや面白がることはできない。

子どもたちの絵をそつと覗くと、誰も僕が教えた通りには描いていない。シイタケの笠を点々で描かず、ぶきつちよな線で描こうとするし、淡墨では描かずすべて濃墨を使おうとしたりする。形などまとまりもないものも多く、シイタケではなくてお化けのようにも見えたりする。だが、どの絵も大人では決して描出できない何かがある。その何かは、水墨画では最も大切な『何か』だ。

僕の顔に墨を塗った男の子が、指先だけでなく、手の全部で画面いっぱいにドバツと線を引いた。僕は目を見張った。いい線だ。僕が教えたことなど何一つ模していない。勝手に描いて、勝手に僕よりいいものを作っている。返す手で、擦れながら軸を描いた。

現実には存在しない巨大なシイタケがたった二筆でできあがった。

(3) 「すごい」と僕が声を出すと、大きな口を開けてこちらを向いた。正確には、真上を見上げて僕を真下から覗きこんだ。僕は彼が汚さないうちに半紙を取り上げた。

僕はホワイトボードの前の作業机に彼を案内し、名前を訊ねた。すると、

「ゲンキ！」と答えた。「そうだね」と頷こうとしたが、もう一つの可能性を考えた。

「ゲンキ君っていうの？」

彼は大きく頷いた。

「友田元気です！」と大声を張った。なるほど、名前に似つかわしい精神の持ち主のようだ。僕は小筆を渡し、下の名前を書くように指示した。彼はすらすらは自分の名前を書けなかったけれど、大きく力強く書いた。絵に似つかわしい字だった。

「素晴らしい絵でした。びっくりしました。力強い線に、先生は感動しました」

と伝えると、照れくさそうに笑って、下を向いたり、横を向いたり、上を向いたりした。ほんの少しだけ僕の方を向いたときに、微笑むと「へへ」と言った。その声はとても可愛かった。彼は、「また描く」と言っ(4)て自分の席に戻っていった。僕が、ホワイトボードに彼の作品を貼ると、全員から声がもれる。真似をして大きな作品を描き始める子も現れた。

「ああこれはいいな」と思った。もし、失敗しても次々に紙を替えることができて、良いと思えば隣の子の真似をし、それがうまくいかなければ、また本物のシイタケに戻る。それを繰り返している。

全員が、(5)、無限の変化をするシイタケの究極の形を探しているようにも思えた。水墨画というのは、もしかしたらこういうふう(6)に発展したのではないかとさえ思ってしまう。僕は次々に子どもたちの作品をピックアップしていった。

みんな違う。そして、描き始めれば、それぞれが比べようのない個性なのだと分かる。椎葉先生はこのことを言っていたのだ(7)なと思に至った。ナれてきたところで、僕も少しずつ助言をはじめて、なるべく手が止まらないように指導した。

いつのまにか子どもたちの中に、年配の女性が一人混じって指墨を始めている。年季の入ったデニム地のエプロンを着けてい

て大量の染みや汚れがついている。ペンキか絵具えのぐか墨か、ともかく黴(7)しい汚れが模様が変わっているエプロンだった。他のクラス(7)の先生かもしれない。僕が驚いて見つめていると、

「青山先生、私も教えて下さい」

と品のよい声で促された。状況はよくわからなかったが、子どもたちに与えているものと同じような助言を彼女に与えることにした。

「形は思うままに描いて下さい。この通りじゃなくてもいいんです。描きながら、楽しそうだと思うほうに手を動かして下さい。新しいやり方をみつけたら、それを試してみして下さい。紙はいっぱいあるんだから」

そんなことを、相手の動きを見ながら伝える。彼女は絵画の心得があるようで、目の前にあるシイタケの形を意識して綺麗きれいに描いていた。その分、線に少し面白みがない。器用すぎるのだ。⁽⁸⁾僕はシイタケを取り上げた。彼女は驚いた。僕は微笑んだ。

「形ではなくて、心に浮かんだものを、今度は描いて下さい」

そう言うと、彼女は大きく微笑み、

「青山先生、ありがとうございます」

と深く頭を下げた。僕はその仕草にあたふたしてしまった。驚いた僕を視界から外し、彼女は描き始める。僕はその姿を見て取り、次の席に移動した。目の前に、大苦戦を強いられている子がいた。

水帆ちゃん(注3)だ。

手が止まっている。何枚か描いたようだけれど、どれも小さく生き生きとしていない。僕が傍そばに来たときも首をカタムけて、つまらなそうに紙を見ていた。僕は彼女の目線に目を合わせるため屈かがんだ。

「水帆ちゃん、どうしたの？」と訊ねると、眉(10)をひそめた。⁽¹⁰⁾話す気はないようだ。筆を持ってないことと、うまくいかないことがつまらないのかもしれない。

「指墨画は面白くないかな」コクンと頷く。「どうして？」と訊ねると、

「きれいな線じゃない」と言った。僕は思わず微笑んでいた。この子の心は絵師なのかもしれない。

「僕も最初はそう思った。でも指墨画をやっているうちに、これは絵を描いていく上ですごく大切なことをいっぱい勉強できるなあって思ったよ。先生と一緒に少しだけ描いてみよう」

彼女はまた無表情のままこちらを見ていたけれど、僕が微笑むとやっと頷いてくれた。

「じゃあまず普通に描いてみよう」

僕は彼女の前にシイタケを置いた。彼女はそれをじっくりと観察したあと、指先に墨を浸けるとサッと線で描いた。面白いの
ない円と軸が二筆で描かれた。他の彼女が描いたものとほぼ同じだ。

「同じ」彼女はボソツと言った。つまらない、という意味だろう。たぶん物足りないのだ。あれだけ筆を使う楽しさを感じて
た子なら当然かもしれない。

「じゃあ次に、ちよっと手を洗ってみて」

僕は筆洗に入った綺麗な水で手を洗うように指示した。真新しい布巾で水分をヌグ⁽¹¹⁾い、指先はさっきよりも綺麗になった。僕は
シイタケを手渡した。

「指先で触ってみよう」

彼女は小首をかしげた。何を言っているんだ、という表情だった。そして、

「見たものを描くんじゃないの？」と訊ねた。

僕は首を振った。

「目で見たものを描くなら、見てるだけでいい。でも、手で触れた感触はどうやって描く？」

しばらくして、彼女はハッとしたように言った。彼女は

(12)

「手で触る」とはつきり言った。その答えが欲しかった。僕は本当に微笑んだ。子どもと一緒にいるときにだけ現れる『伝わる』
という感覚だった。

「そうだよ。手で触った感触を描くには、触るしかない。目で見たものだけが、絵になるんじゃないんだ。形だけが絵になるんじゃないんだよ。目には見えないものさえ絵になるんだ」

彼女はうんうんと何度も頷き、シイタケに触れた。小さな指先で、襷ひだに触れ、笠に触れ、軸に触れ、石づき注4に触れた。笠の周囲のでこぼこに触れたとき、大きく目を見開き、光にかざしてシイタケを全体から眺めた。

これこそが、おそらく子どものころの湖山先生が師に指墨を遊びとして授けられた意味なのだろう。彼女はもう一度、シイタケの全体に触れる。すると、こちらを見向きもせず指に墨を浸けて絵を描き始めた。

絵が変わった。

筆致は遅くなり、墨つぎは増え、線はでこぼこになった。形はさつきよりも歪いびつで、整わなくなった。けれども、さつきよりも面白味があり、生き生きとしたものになった。

僕は微笑んだ。

彼女はさらにそこに水を足して、墨をボケさせ、笠を完成させると軸を描き、濃墨で、軸の切れ目の石づきを塗った。墨面にかすれを与えるために布巾に墨を吸わせることまで思いついていた。

絵には明らかに形以上のものが描き加えられていた。形を超えたものを表現しようとしていたといってもいいかもしれない。

彼女の感覚が絵の中にはあった。

「手で触れてみてどうだった？」と僕は水帆ちゃんに訊ねた。すると、

「でこぼこだ！」と、また大きな声で答えた。僕はまた嬉うれしくなった。これまで感じたことのない喜びだった。

簡単な言葉だけれど、そうじゃない。彼女が描いたのは、でこぼこ以上のものだ。そして彼女が指先で触れて感じ取ったものは、言葉にはしようない複雑な感覚や、もつといえど生命感そのものだ。それが、瞬く間に、小さな指先から絵になった。

それを描出しようとするので、より深く感じ取り、一つにまとめようとするので新たに感覚を生み出す。⁽¹⁴⁾オしみなく、彼女はそこに注ぎ込まれていく。それは、絵を描く喜びだった。喜びがたった一個のシイタケに溢あふれていた。⁽¹⁵⁾この直截性は、筆で

はとても再現が難しい。けれども、指先なら誰でもが達人のような感覚で描くことができる。

「**氣韻生動**……」と僕の口から、思わず言葉がもれた。

「きいん、せいどう……？」と彼女は言葉を繰り返す。その拙い声の響きが、また僕に大切なことを教えてくれた。

「言葉なんてどうでもいいんだよ。生き生きとした線を引くことや絵を楽しむことが、一番大事だってことだよ。僕も昔、それを教えられたんだ。ずっと忘れていたけどね」

「先生でも忘れることがあるの」

「忘れちゃうよ。どんな大切なこともね」

彼女が澄んだ瞳でこちらを見て微笑んだ。大人が微笑むときのようだった。彼女の知性が微笑んだのかもしれない。

「じゃあ、私がときどき思い出させてあげるね」

彼女がその日一番、優しく微笑んだ。突然、**光芒**に射られたような眩しさに目を細めた。微笑んだり、頷いたりしなければならぬ。彼女は待っている。けれども、何も言えない。

⁽¹⁶⁾ 不自然なほど彼女を待たせた後、

「ありがとう」と僕は小さな声で言った。

(砥上裕將『二線の湖』による)

(注1) 僕の顔に墨を塗った男の子——「僕」は、一回目の授業で、ひととき元気のよい男の子をなだめようとかがんだ時、顔に

墨を塗られてしまった。

(注2) 椎葉先生はこのことを言っていたのだな——水墨画を教えているクラスの担任の椎葉先生は、一回目の授業が終わった後、「僕」に、絵を描いている子どもたちがいつも生き生きとしていたことを伝えていた。

(注3) 水帆ちゃん——生徒の一人で、一回目の授業で筆を使った時、とても生き生きと絵を描いていたので「僕」の印象に残っ

ていた。

(注4) 石づき——シイタケの軸の根もとにある黒ずんだ硬い部分。

問 1 傍線番号(1)・(6)・(9)・(11)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1
5

(1) ウラヤましい

1

- ① 独立をセン言する
② セン在能力が高い
③ 新センな山の空気
④ セン薄な考え方だ
⑤ セン望のまなざし

(9) カタムけて

3

- ① ケイ発書を読む
② 実ケイ判決が下る
③ 文学にケイ倒する
④ 恩ケイを受ける
⑤ 練習をケイ続する

(14) オしみ

5

- ① 自セキの念を抱く
② 親友とセキ別する
③ 船が一セキとまる
④ 戸セキを確認する
⑤ 功セキを多く残す

(6) ナれて

2

- ① 会社のカン行にならう
② 洋書のカン修を務める
③ 図書委員にカン誘する
④ 解決方法をカン案する
⑤ 日本一の栄カンに輝く

(11) ヌグイ

4

- ① 過去を払シヨクする
② 部屋を装シヨクする
③ シヨク務を遂行する
④ 誤シヨクを訂正する
⑤ かきを養シヨクする

問2 傍線番号(2)・(7)・(10)・(15)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6

9

(2) 目を見張った

6

- ① 警戒して見続けた
- ② 感動のあまり微笑んだ
- ③ 心配しながら見守った
- ④ とつさに視線を向けた
- ⑤ 驚いてじつと見た

(10) 眉をひそめた

8

- ① 不審そうな表情をした
- ② 冷ややかな表情をした
- ③ 不機嫌な表情をした
- ④ 戸惑った表情をした
- ⑤ すずしい表情をした

(7) 夥しい

7

- ① 端まで広がった
- ② ひどく黒ずんだ
- ③ 点々と飛び散った
- ④ すさまじい量の
- ⑤ ぎよつとする色の

(15) 直截性

9

- ① 手短かに表現するさま
- ② 回りくどくないさま
- ③ 単純化して伝えるさま
- ④ 輪郭が太く明確なさま
- ⑤ 手法が自然なさま

問3 傍線番号(3)『すごい』と僕が声を出すと」とあるが、「僕」が「すごい」と言ったのはなぜか。その説明として、最も適

切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

10

- ① 男の子が、「僕」ではとても思いつかないような、空想的な絵を描ける想像力の持ち主だったから
- ② 男の子が、「僕」の指示には従わず、自分が手っ取り早いと思う方法で力強い線を表現できたから
- ③ 男の子が、「僕」の言うことを理解できないなりに、「僕」が考えるよりも立派な絵を描けたから
- ④ 男の子が、「僕」の教えたことに一切とらわれず、勢いに任せて自分が思うままの絵を描いたから
- ⑤ 男の子が、「僕」の助言は必要ないほど絵に集中し、上手に指先だけを使って絵を完成させたから

問4 傍線番号(4)『ああこれはいいな』と思った」とあるが、「僕」が『いいな』と思った」ことの説明として、最も適切な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① お手本となる絵を見た生徒たちがみんなそれに似た作品を描こうとして、ばらばらだった教室に一体感が生まれたこと
- ② 自分の絵も公開してもらいたいと思った生徒たちの競争心がかき立てられ、みんなが真剣に作品に取り組み始めたこと
- ③ みんなが友だちの描いた絵や実物を見ながら、それぞれ自分の作品のために試行錯誤する流れが出来上がっていたこと
- ④ ホワイトボードやたくさん紙を用意して、生徒が効率的に何枚もの絵を描くことができる授業方法を思いついたこと
- ⑤ 絵を褒められた生徒が喜びながらも慢心することなく、さっそく次の作品を描こうとするほど意欲にあふれていたこと

問5 空欄番号(5)に入る四字熟語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 千差万別 ② 百花繚乱 ひやっかりようらん
③ 異口同音 ④ 日進月歩
⑤ 切磋琢磨 せつさたくま

問6 傍線番号(8)「僕はシイタケを取り上げた」とあるが、なぜこのようにしたのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 彼女は過去に絵を習っていたらしいが、対象を忠実に写し取る手法しか知らず、今はシイタケという画題に固執することなく、思いついたものをありのままに描いてほしかったから
② 彼女の描く絵は上品である反面、線が細くどこか迫力に欠けるようにも思われ、今は目の前のシイタケよりも子どもたちが描いているような力強い絵を見本にしてほしかったから
③ 彼女には絵の技術があるようだが、現実のシイタケを模写しただけの絵には水墨の良さがいまひとつ感じられず、今は目に見えるものに縛られない自由な絵を描いてほしかったから
④ 彼女には絵の経験があるようだが、上手に描いてやろうという描き手の作為がすけて見えてしまっており、今は実物を見ずに描くことでもう少し素朴な絵に仕上げてほしかったから
⑤ 彼女は絵を描く能力が人よりも高いようだが、目の前にあるシイタケを意識した具体的すぎる絵になっており、今は心に浮かぶイメージのように抽象的な絵を描いてほしかったから

問7 空欄番号(12)に入る表現として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 目を細めながら
- ② 一瞥^{いちべつ}をくれながら
- ③ 眉をつり上げながら
- ④ 目を白黒させながら
- ⑤ 瞳を輝かせながら

問8 傍線番号(13)「さつきよりも面白があり、生き生きとしたものになった」とあるが、ここでの「生き生きとした」とはどのような様子のことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 心や体全体で感じ取ったものが素直に表現されている様子
- ② 絵から飛び出してきそうなほどに現実味を帯びている様子
- ③ 線のでっぱりやくぼみ、ゆがみが激しくて斬新である様子
- ④ 描いた人の喜びを明るい色遣いにたくした情感豊かな様子
- ⑤ 正確性よりも奇をてらった面白さが前面にあふれ出た様子

問9 傍線番号(16)「不自然なほど彼女を待たせた後」とあるが、彼女を待たせている時の「僕」の心情の説明として、最も適切

なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 水帆の発した一言が芸術家としての道に迷っていた自分の琴線に触れ、彼女がつかの間に見せた慈愛のある表情に魅入られている
- ② 水帆の優しい心根に触れたことで自分の将来についてのわだかまりが消え、このうえないありがたみで胸がいっぱいになっっている
- ③ 水帆の核心をついた何気ない言葉に自分のほうが大切なことを教えられたと思い、子どもの純粋さに感じ入って言葉を失っている
- ④ 水帆の描いた絵に芸術の究極の姿を見た気がして、短時間で絵の真髄に触れることのできた彼女の素質に驚きつつも感激している
- ⑤ 水帆とのやりとりを通じて自分がずっと忘れていたものを思い出し、双方に実りのある授業ができたことに感慨無量になっっている

問10

本文の内容と表現についての説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 指水墨に対しておもしろさを見出せ^{みいだ}なかった水帆が「僕」の授業を通じて徐々に心を開いてゆく過程が、第三者の客観的視点から描かれている
- ② 子どもたちとのコミュニケーションで「僕」が絵に大切なものを再認識するに至る過程が、表情の動きを交えた心理表現によつて描かれている
- ③ 「僕」や他の先生と生徒たちが一丸となつて理想の作品をつくり上げていく過程が、教室の中で交わされる軽妙な会話劇を通じて描かれている
- ④ まだ上手な絵は描けないという「僕」の子どもたちへの見方が変化する過程が、生徒の絵から受けた「僕」の印象を踏まえながら描かれている
- ⑤ 芸術の心構えを知らない子どもたちが絵の素晴らしさを学んでいく過程が、生徒たちの機嫌を上手にとる「僕」の器用さを通して描かれている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

木造建築が主流であった日本において「古くなったら新しいものに建て替える」という考え方は長く疑われることなく続いてきたが、都市再生やまちづくりの文脈で「リノベーション」という言葉が一般化し、事例で示した「コンバージョン」(用途変更を伴うリノベーション)という考え方が日本でも浸⁽¹⁾トウしてきている。古いものをただ残すのではなく「今・ここ」に活⁽¹⁾かすというコンセプトはわれわれにとっても身近なものになりつつある。実際、空き家、廃店舗、廃ビル、廃校等の(再)利用(地域資源化)の事例は、規模の大小にかかわらず、このところ至る所で見られるようになった。こうした状況ではアートの存在感も増している。実際、空間のあり方を変えること——例えば、そのすべてではないが、アートと無縁と考えられてきたものをアート空間に転⁽¹⁾じること——は、アートの得意とするところでもある。

近年、社会的公共的な事業について、その担い手は「公」か「私」かという単純な二分法に囚⁽²⁾われない考え方と手法も広がっている。建造物の保全とその後の利活用に関してもハード面だけでなくソフト面についても、公民連携(PPP、PFI等)という手法など、資金調達や事業運営のあり方の模索も続いている。成功例も失敗例もありその当否については当然議論はあるが、さまざまな実践が各地で積み重ねられる中、選択肢が広がっていることは確かだろう。

われわれはどうしてもこうした問題⁽²⁾を素朴な意味での「経済」(お金の問題)として論じがちだが、重要なのは、短期的な利害得失に過度に囚われることなく、長期的な視野で、地域社会と地域文化の問題を考えることである。両者の接触界面には広義の「経済」(文化経済、創造経済等)の問題が横たわっていること、広義の文化と経済の間には一筋縄⁽³⁾ではいかなない関係があることに自覚的であるべきだろう。

しかし、そうした手法の問題以上に重要なのは、その対象が何であれ、その価値に気づくこと＝価値を見いだすことである(そのまま・ありのままの価値か、そこに手を加えたりするかという問題はあるが)。価値を認め、評価することの難しさは、やはりこうした問題を考える上での一つの壁とも言える。

文化的価値の認識（評価）はどのようにして可能になるのか。文化資源・文化遺産という視点をいったん離れ、「文化資本」という概念についてここで触れておきたい。字面は似通っているもののこれらの語Ⅱ概念は、議論の背景も枠組みも異なり、同じ水準で論じることが困難だが、やはりこの文脈で取り上げておくべきだろう。文化資本は、術語としては文化経済学の領域でも用いられるがここでは社会学的な議論に⁽⁴⁾ソつて紹介したい。

社会と文化の関係を深く掘り下げて、独自の社会学を構築したピエール・ブルデュー（1930～2002）は、社会秩序と文化的秩序の関係性の問題を「権力」と「正統性」の視点から捉え、文化資本（capital culturel, cultural capital）という概念を開発した。彼によれば、これには3つの様態がある。

- ①客体化された文化資本
- ②身体化された文化資本
- ③制度化された文化資本

①は、可視化された、モノとしての文化である。絵画、彫刻、書物、建造物のような、まさに実体・実在としての文化であり、一般に文化的な財（goods）と考えられる対象である。その意味で経済学的な対象として扱うことも可能である。しかし、文化⁽⁵⁾というものを考える上で極めて示唆的なのは、②と③の視点である。②はいわば知識や教養、理解力あるいは技能、センスといった人に身につけられた、その人自身の存在と分離できない文化である。③は文化を価値として評価し、社会的に認知、象徴化あるいは形式化された形態のことである。学歴や資格あるいは称号・肩書などを考えればよい。②③の要素がなければ、文化は「生きた」ものにはなりえない。実際、文化的対象を理解し、愉^{たの}しみ、価値付けるといった人間の知的、情動的作用を含めた行為が文化を文化たらしめる。

この考え方に従えば、文化財はその価値を理解し、社会化する（「権威づけ」もその一つ）契機があつて始めて意味を持つ。文化資本の議論はこれにとどまらないが、この概念を通して文化芸術に関わる諸事象についてさまざまな⁽⁶⁾観点から考えることができるだろう。例えば、何かに気づくこと、何かの価値を認めること、それは一定水準の身体化された文化資本によつて可能にな

る。ある文化的対象と身体化された文化資本の「出会い」がなければ、そこに文化的享受（知的・美的な興奮あるいは**喜び**）は生まれない。

有形でも無形でもある文化の実相を可視化し客観化することは意外に難しい。文化資源あるいは文化遺産について考えると、文化資本という視点でこれを捉え直すことによって文化の現れ方の多様性と捉え難さ——文化という対象の動態性と不可視性——についても目を向けることができるだろう。文化と経済の問題は、それを捉える視点によって違ったものとして見えてくる。

ブルデューは、階層的な格差や文化的な葛藤の問題を現代社会の表層と深層を相関的に捉えることを通してスルドく分析した。⁽⁷⁾その議論から学ぶべきことは多い。

見てきたように、「文化」は、「資源」「遺産」「資本」等々の**価値**や**豊かさ**を示唆する術語**概念と結びつけて語られる**ようになっていく。⁽⁸⁾それは「文化の経済（学）化」というべき認識と結びついている。ここにあるのは文化と経済の「間」の問題であると言ってもよいだろう。

われわれは、有形無形の文化とどう向き合うべきかを問われるようになっていくが、それは価値をどう捉えるかという問題でもある。この問題は、経済的価値（**貨幣的価値**）⁽⁹⁾の論理と切り離せないが、そこに**すべてが還元されると考えるのは単純に過ぎる**だろう。文化芸術がこの視点（収益性等の経済的尺度）でのみ語られることになれば、そのことがもたらす評価（基準）の単純化や一面化といった負の影響は決して小さくはないだろう。われわれは文化芸術を経済と直結させる「**短絡**」⁽¹¹⁾的思考に注意を払う必要がある。

仏像、絵画、建築あるいは伝統芸能等々、何であれ文化的対象の価値を社会的に評価することは容易いことではない。文化的対象の価値は自明ではない。実際、(12) **がこうした価値を直接に確認することは極めて難しい**。しかし、こうした対象は、基本的に誰に対しても開かれた存在であるはずである。資源や遺産となりうるものを発見するということは、価値に関わるさまざまな問題を社会的に再認するということでもある。

文化の問題を——いわゆる地域文化の問題を含め——地域において考えるとき、そこで専門家の果たす役割は大きいが、地域の人々自身が当事者としてできるだけそこに関わることは本来自然なことだし実際そうあるべきだろう。いわばシティズンシップ（市民権）の理念は文化芸術においても重要だろう。その意義の重みは今日より強まっている。このことは、また、文化に向き合う主体の「見る眼」が問われているということでもある。その「眼」はどこでどのように養われるのか。「眼」を養うためには（広義の）教育は不可欠だろう。学校教育は極めて重要だがこのことはそれによってのみ可能になるわけではない。⁽¹³⁾ 社会教育の重要性に改めて光が当てられるべきだろう。家庭環境や広義の地域の環境（人的物的な諸条件）もまた大きな役割を果たすはずである。これは文化資本（の形成）の問題でもある。

例えば、円空^(注)仏は一つの（客体化された）文化資本として捉えることができるが、そのためにはそれを価値ある対象として認める主体の（身体化された）文化資本（見る眼）が前提条件となる。地域文化とは、こうした、人、もの、環境の総体のことではないのか。

われわれはここしばらくの間に立て続けに地震や津波、豪雨など大きな自然災害を経験し、当たり前だった日常性が突然奪われることの辛さを知った。また、産業化や人口構造の変化は——災害に比べればゆるやかかもしれないが——確実にわれわれの物的心的環境を変えてきた。われわれはこの間失われたものの大切さ貴重さに改めて気付き始めている。

そうした理由ばかりではないだろうが、このところ、文化財のような特別な文物だけでなく、時代を問わず、庶民の生活用具（農具や日用雑貨、玩具等）⁽¹⁴⁾のような日常的でありふれたアイテムにも人々の関心が集まるようになっていく。時代とともに移り変わる食やファッション、大衆音楽や芸能なども同様である。人々の「生」に関わるものはすべて保存や展示に値する価値を持つと考えられるようになってきた。実際、これまで見てきたように、テーマ（人類学的、民族学・民俗学的主題等）によって博物館・美術館等の公共空間でもそうした人々の暮らしに根ざしたアイテムが展示対象になることは普通のことになってきた。これらは社会的認知の対象になる（例えば「コレクション」化される）ことで一定の意味を持ち地域資源や文化資源ともなりうる。実際、かつては文化芸術の対象として扱われなかった文物・アイテムを保存し活用する「アーカイヴ」の重要性についても

関心が高まっている。このような、「地域」自体を一つの文化的総体として捉え、また文化そのものを厚みのある複合的な総体として受けとめようとする姿勢は、人々の間に濃淡はあれ、広がっているように思われる。

地域の文化資源あるいは文化遺産を見だしそれを活用することは、一朝一夕でできることではない。このことを考えるとき、われわれは、⁽¹⁵⁾地域において「長い目で文化を育てる」ということの難しさとその重要性にたどり着くように思われる。文化の形成にとって重要な要素はさまざまある。これまで多くの場合、家庭や学校がその場になってきたが、それらを包⁽¹⁶⁾セツする地域の存在は現在大きくなってきているように思われる。もちろんこれらに強い影響力を持つ国（中央政府）の役割は大きいですが、単に地方自治体ということではない、むしろ非限定的な意味での（公私を超えたものとしての）「地域」——知的文化的な環境としての「地域」が文化形成の主体としてより重みを増してきている。

（小松田儀貞『社会化するアート／アート化する社会——社会と文化芸術の共進化』による。一部改変し、中略した箇所がある）

（注1）事例で示した——この文章より前の箇所、筆者は、欧米で廃墟^{はいきょ}となった発電所が美術館にリニューアルされたことなど、「コンバージョン」の事例を挙げている。

（注2）円空仏——江戸時代の修験僧円空が各地を巡りながら残したといわれる木彫りの仏像。

問 1 傍線番号(1)・(4)・(7)・(9)・(16)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

18

22

(1)

浸トウ

18

- ⑤ トウ質を控える
④ 野トウ結集を図る
③ 光をトウ過する
② 自己トウ酔する
① 病トウを移転する

(4)

ソつて

19

- ⑤ 妖エンな姿にひかれる
④ 利用料をエン滞する
③ 薬でエン症を抑える
② エン岸部に引越す
① エン会を盛大に開く

(7)

スルドく

20

- ⑤ エイ断を下す
④ 精エイを集める
③ 宮中を護エイする
② 意見を反エイする
① エイ嘆の声を上げる

(9)

貨ヘイ

21

- ⑤ 補足をヘイ記する
④ 旧ヘイを見直す
③ ヘイ塞感に陥る
② 若者を徴ヘイする
① 造ヘイ局を訪れる

(16)

包セツ

22

- ⑤ セツ盗の被害にあう
④ 事務セツ衝を進める
③ 無駄なセツ生を禁ずる
② 薬を経口セツ取する
① 対策本部をセツ置する

問2 傍線番号(2)「こうした問題」とあるが、この内容の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

23

- ① 事業の進め方について検討するとき、経済的な観点が優先される風潮があるということ
- ② 事業の主導者や運営方法を、さまざまな形態の中からどのように選ぶべきかということ
- ③ 事業の主体や手法の決め方が、「公」か「私」とかという二元論に陥りやすいということ
- ④ 事業への取り組みの実践方法が、近年においてなぜ広がりを見せているのかということ
- ⑤ 事業の成功例や失敗例にもとづき、今後どのような展開をしていくとよいかということ

問3 傍線番号(3)・(11)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

24

25

- (3) 一筋縄
- 24
- ① 一回だけの挑戦
 - ② 安易な発想
 - ③ 間に合わせの知識
 - ④ 不十分な準備
 - ⑤ 一般的な方法

- (11) 短絡
- 25
- ① 利害を優先すること
 - ② 性急に導き出すこと
 - ③ のんきに構えること
 - ④ 断片的に捉えること
 - ⑤ 都合よく考えること

問4

傍線番号(5)「文化というものを考える上で極めて示唆的なのは、②と③の視点である」とあるが、ここで筆者が言おうとしているのはどのようなことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

26

- ① 文化には実体を伴う文化財としての姿の他に、人間の教養や学歴などの形のない様態もあり、今後は文化の多様性を認める視点が求められるということ
- ② 文化を理解したり楽しんだりすること、そしてその価値を正しく認識することが、文化を経済学的な対象として扱う上で欠かせないものであるということ
- ③ 人々が知性や洞察力を通して文化を捉えたり、文化を社会的なものとして位置づけたりすることが、文化の価値を形成する行為になっているということ
- ④ 文化を文化として享受するために、絵や彫刻などを鑑賞するだけでなく、その価値を理解できるだけの教養や資格を身につけなければならないということ
- ⑤ 人間から分離できない身体化された文化や、学歴や称号などの記号化された文化は、客体化された文化の存在によって真に文化的な価値をもつということ

問5 傍線番号(6)・(10)の語句の品詞は何か。次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

27

28

- ① 名詞 ② 副詞 ③ 形容詞 ④ 形容動詞 ⑤ 連体詞

- (6) さまざまな (10) すべて

27

28

問6 傍線番号(8)「『資源』『遺産』『資本』等々の『価値』や『豊かさ』を示唆する術語」概念」とあるが、この「術語」概念

はどのようなものと言えるか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

29

- ① 文化のあり方が、有形無形問わず本来は多岐にわたっていることを示唆するもの
② 文化の革新が、資源や遺産、資本などの点から語られやすいことを暗示するもの
③ 文化の実相は、経済学的な視点からアプローチするのがよいことを証明するもの
④ 文化の価値が、しばしば経済的な面からのみ捉えられていることを象徴するもの
⑤ 文化の問題が、経済の問題と並行して議論されるべきであることを指摘するもの

問7 空欄番号(12)に入る表現として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

- ① 文化芸術を集中的に担っている者
- ② 資源や遺産を発見できなかった者
- ③ 「市民」の枠組みから排除された者
- ④ 市場や専門家の権威の外にある者
- ⑤ 地域から離れた場所に住んでいる者

問8

傍線番号(13)「社会教育の重要性に改めて光が当てられるべきだろう」とあるが、筆者がこのように言うのはなぜか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

31

- ① 地域を一つの文化的総体として厚みあるものにしていくためには、一つの文化資本に対し多様な価値を見いだせるようにさまざまな学問に触れるべきだから
- ② 地域において文化の問題を考えたり文化資本を育んだりしていくためには、地域文化を人、もの、環境などの社会全体のものとして考えていく必要があるから
- ③ われわれを取り巻く物的・心的環境に根づく地域文化と向き合うためには、天災や社会構造の変化から文化を守っていく必要性を学ばなければならないから
- ④ 文化資本に向けられる地域の人々の「見る眼」を通して文化的対象の価値をより高いものにするためには、学校教育に限定しない広義な教育が不可欠だから
- ⑤ 地域に存在する客体化された文化に向き合える審美眼を養うためには、人々が義務教育の過程でどれだけの教養や知識を身につけてきたかが影響するから

問9 傍線番号(14)「日常的でありふれたアイテム」とあるが、これに関する説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① 所有したり利用したりすることに文化的価値が見いだされるようになった
- ② 時代の変遷に伴い歴史的な価値を帯びて博物館や美術館に寄贈された
- ③ 保存したり展示したりする価値を有するものとして扱われるようになった
- ④ 人々の関心を集めるうちに特別な文物として重んじられるようになった
- ⑤ 記号的な価値を獲得することで市場において取り引きされる対象となった

問10 傍線番号(15)「地域において『長い目で文化を育てる』」とあるが、ここで筆者が「地域」と呼ぶのはどのようなもののか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 中央政府からの影響を受けない独自の領域
- ② 文化形成のさまざまな要素を含み持つ公共団体
- ③ 文化遺産や文化資源として活用可能な場所
- ④ 共通の価値観を有する住民たちのコミュニティ
- ⑤ 単純な区分に縛られず文化的に結びついた環境

問11 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 古くなった建築物を、もっぱらアート空間に変更する目的で改修することを「コンバージョン」と呼ぶ
- ② 文化的価値の認識や評価には、できる限りにおいて対象のありのままのよさを見いだす観点が求められる
- ③ 能や歌舞伎などの伝統芸能は、昔から続く作法を形式化・象徴化した制度的な文化資本に位置づけられる
- ④ 文化本来の姿を見定めることの難しさは、文化と経済の問題に多様な視点が必要なことを示唆している
- ⑤ 「文化的総体」という見方が広がっている現代では、人々の文化的な感度を錬磨することが急務となる